

国内の畜産物の需給動向

牛 肉

7年10月の牛肉生産量、前年同月比1.5%減

生産量

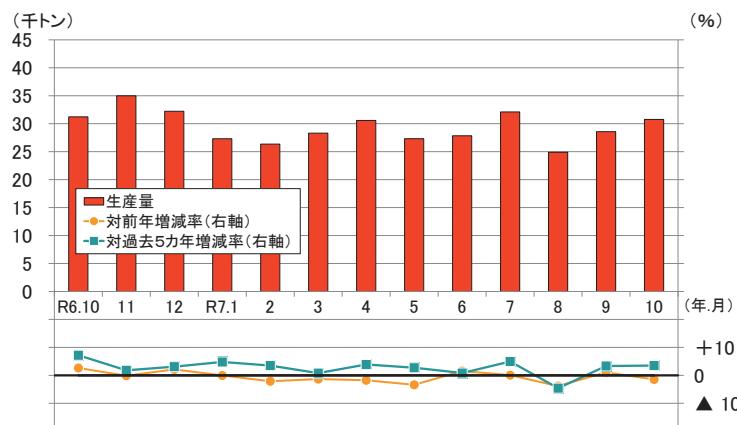
令和7年10月の牛肉生産量^(注1)は、3万767トン（前年同月比1.5%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。品種別では、和牛は1万6278トン（同2.4%増）、交雑種は8210トン（同2.1%増）と、ともに前年

同月をわずかに上回った一方、乳用種は6231トン（同13.6%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

なお、過去5カ年の10月の平均生産量との比較では、3.5%増とやや上回る結果となつた。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：部分肉ベース。

輸入量

10月の輸入量について、冷蔵品では、米国産が現地価格の高止まりなどにより減少した一方、豪州産が増加したことなどから、1万6547トン（前年同月比5.5%増）と前年同月をやや上回った（図2）。冷凍品では、米国産ショートプレート（バラ）や豪州産のうち主に加工用のひき材などに使用されるトリミングの輸入量が増加したことなどから、

3万2587トン（同15.5%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)では、4万9168トン（同11.9%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

なお、過去5カ年の10月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は6.9%減とかなりの程度下回った一方、冷凍品は8.6%増とかなりの程度上回る結果となつた。

（注2）輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移

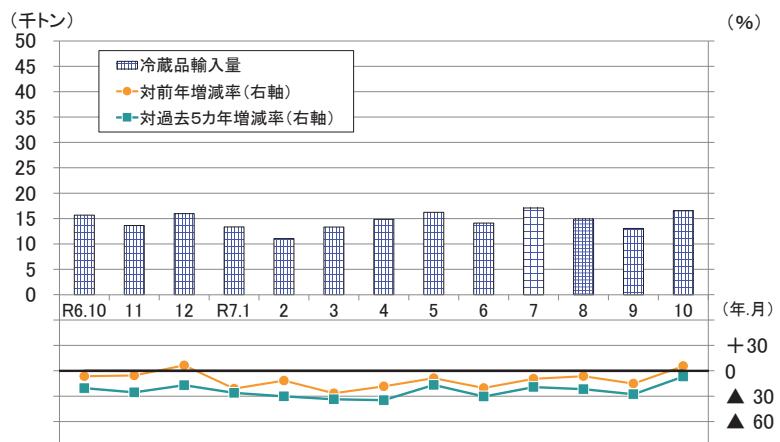
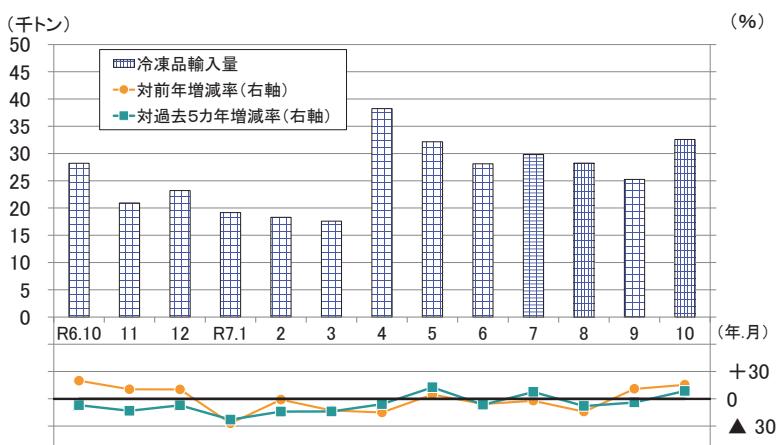


図3 冷凍牛肉輸入量の推移



家計消費量等

10月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注3)は145グラム（前年同月比1.1%減）と前年同月をわずかに下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の10月の平均消費量との比較でも、14.4%減とかなり大きく下回る結果となった。

10月の外食産業全体の売上高は、客単価の上昇が続く中、根強い節約志向から、半額などのお得なキャンペーンに集客効果が見られ、ファストフード業態やファミリーレストラン

の低価格業態が堅調だったほか、一時期鈍化していたインバウンド需要の回復などが下支えし、前年同月比7.3%増と前年同月をかなりの程度上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。

このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、引き続き定番の季節限定メニューやお得なキャンペーンによる集客が好調で、同10.4%増とかなりの程度上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風は、値引きキャンペーンを実施していた前年に比べて客数が減少したが、客単価が上昇し、

同8.1%増と前年同月をかなりの程度上回った。一方、ファミリーレストランの焼き肉は、客数が減少し、同0.3%減と前年同月並みとなつた。

(注3) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

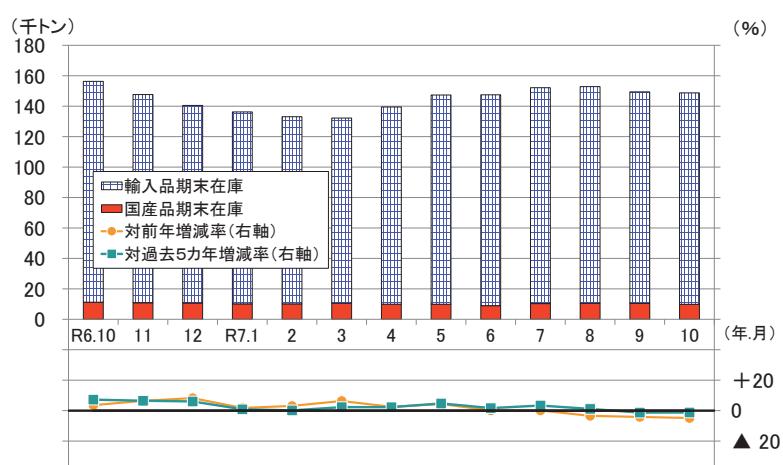
推定期末在庫・推定出回り量

10月の推定期末在庫は、14万8721トン（前年同月比4.9%減）と前年同月をやや下回つた（図4）。このうち、国産品は9824

トン（同12.5%減）とかなり大きく、在庫の大半を占める輸入品は13万8897トン（同4.3%減）とやや、いずれも前年同月を下回つた。

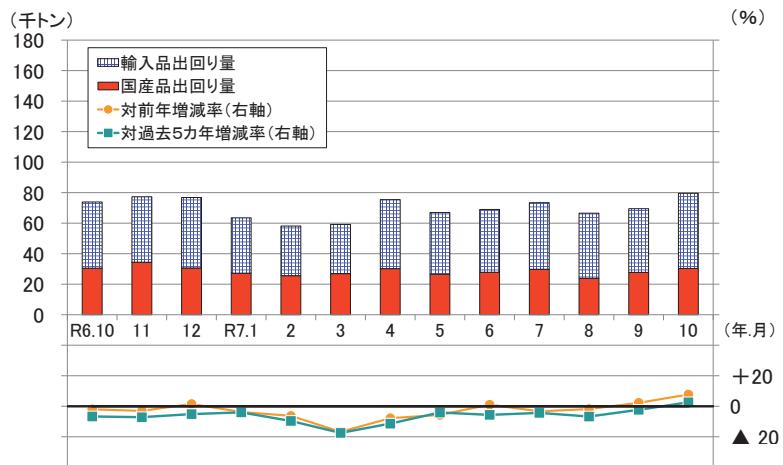
推定出回り量は、7万9606トン（同7.7%増）と前年同月をかなりの程度上回つた（図5）。このうち、国産品は3万347トン（同0.4%減）と前年同月をわずかに下回つた一方、輸入品は4万9258トン（同13.5%増）と前年同月をかなり大きく上回つた。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部 丸吉 裕子）

豚肉

7年10月の豚肉生産量、前年同月比2.3%増

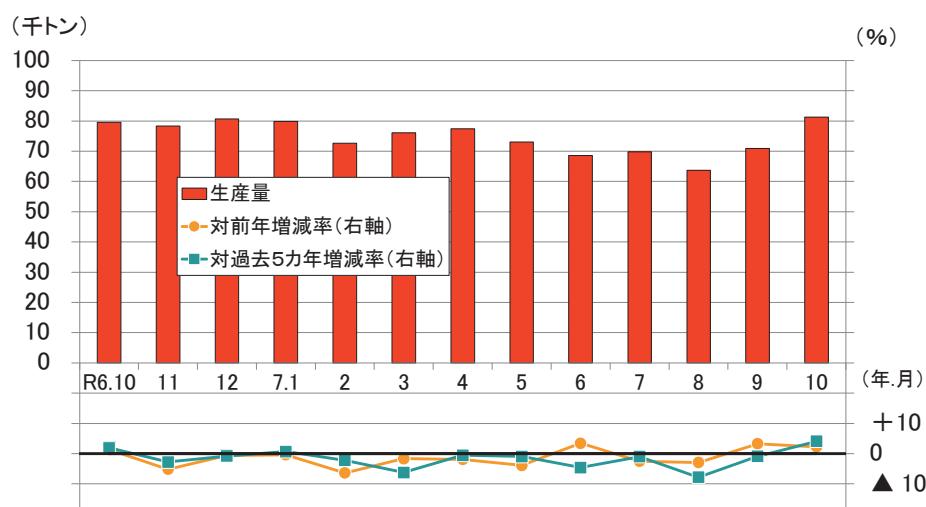
生産量

令和7年10月の豚肉生産量は、8万1313トン（前年同月比2.3%増）と前年同月を

わずかに上回った（図1）。

なお、過去5カ年の10月の平均生産量との比較でも、4.1%増とやや上回る結果となつた。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：部分肉ベース。

輸入量

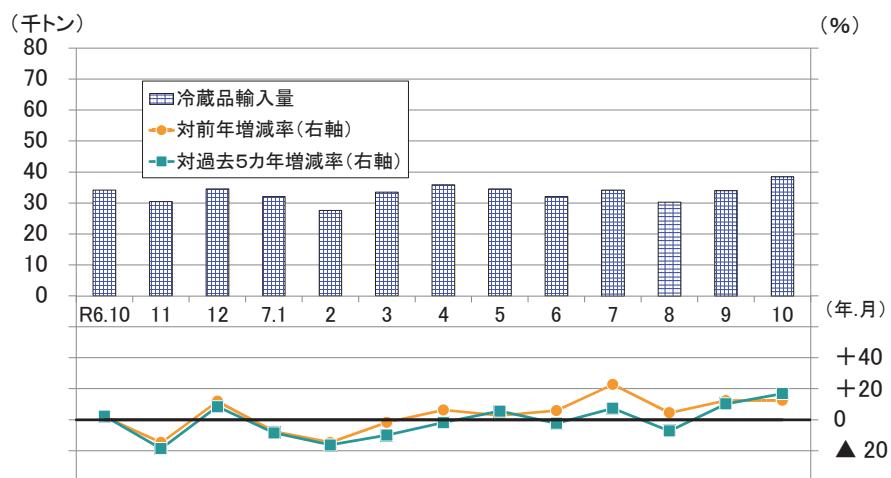
10月の輸入量について、冷蔵品は、価格や規格などで一定の評価を受けるカナダ産が増加したことなどから、3万8473トン（前年同月比12.6%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図2）。冷凍品は、国内の輸入品在庫が依然として高水準にあったことなどから、4万6391トン（同11.7%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図3）。

この結果、輸入量の合計^(注1)では、8万4875トン（同2.2%減）と前年同月をわずかに下回った。

なお、過去5カ年の10月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は17.0%増と大幅に、冷凍品は6.2%増とかなりの程度、いずれも上回る結果となつた。

(注1) 輸入量の合計は、くず肉を含む。

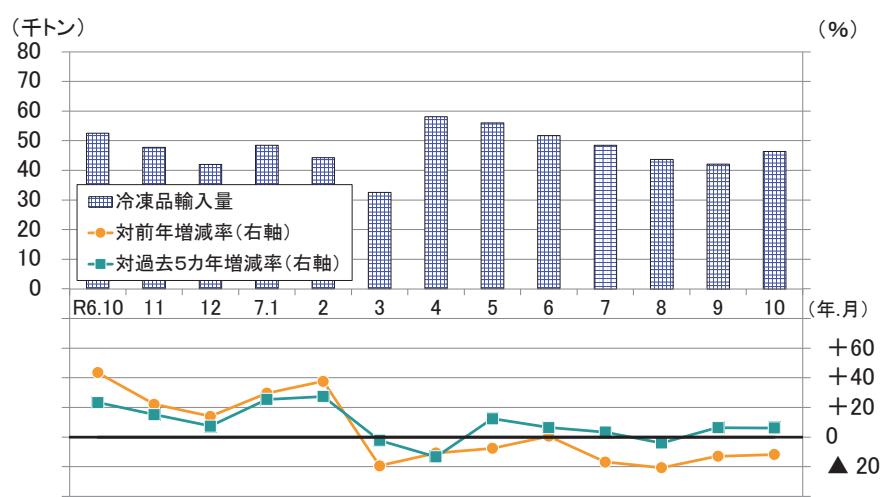
図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」

注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」

注：部分肉ベース。

家計消費量

10月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注2)は、659グラム（前年同月比7.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の10月の平均消費量との比較でも、1.7%増とわずかに上回る結果となった。

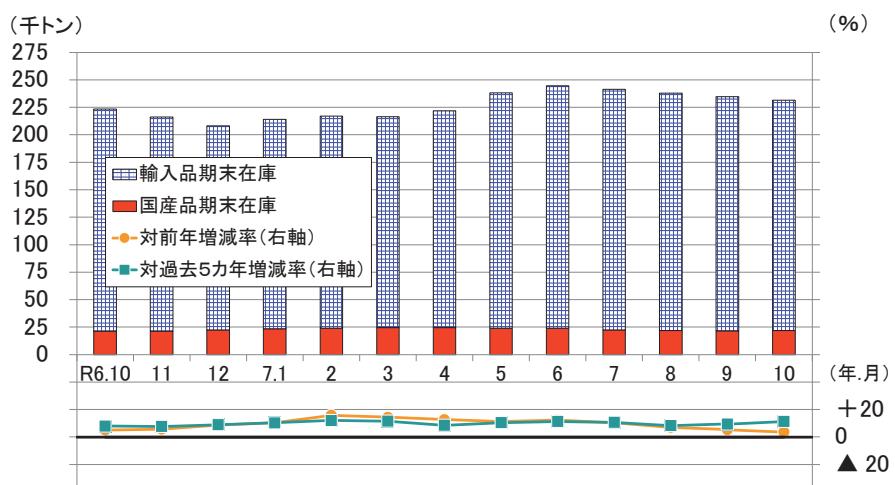
(注2) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

推定期末在庫・推定出回り量

10月の推定期末在庫は、23万1400トン（前年同月比3.6%増）と前年同月をやや上回った（図4）。このうち、輸入品は、20万9457トン（同3.7%増）と前年同月をやや上回った。

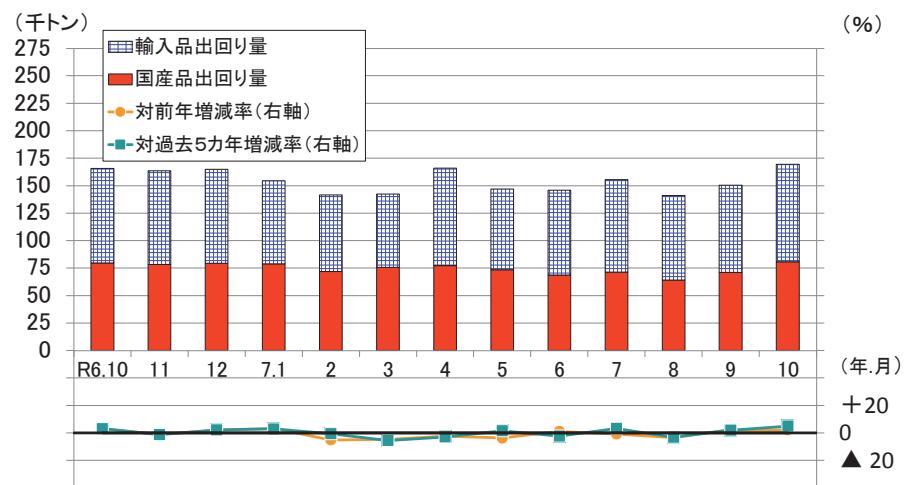
推定出回り量は、16万9382トン（同2.3%増）と前年同月をわずかに上回った（図5）。このうち、国産品は8万789トン（同1.5%増）とわずかに、輸入品は8万8593トン（同3.0%増）とやや、いずれも前年同月を上回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 小森 香穂)

鶏 肉

7年10月の鶏肉生産量、前年同月比2.4%増

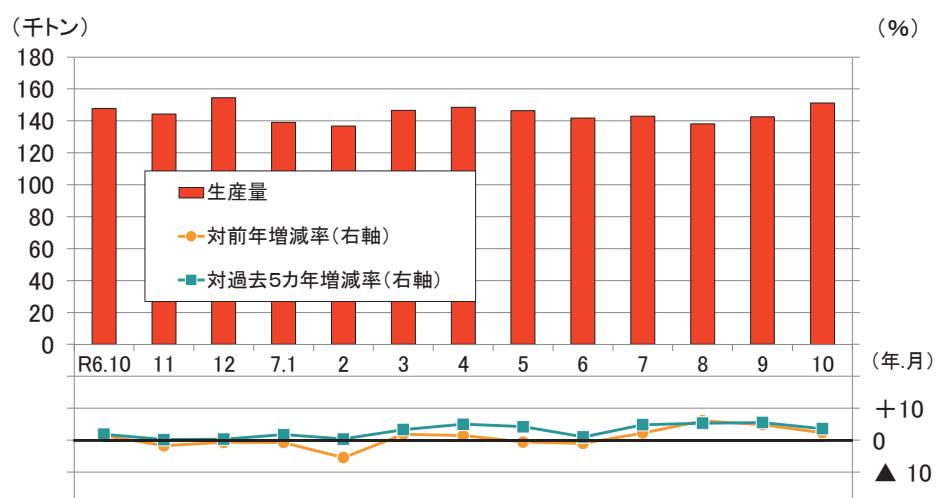
生産量

令和7年10月の鶏肉生産量は、15万1212トン（前年同月比2.4%増）と前年同月

をわずかに上回った（図1）。

なお、過去5カ年の10月の平均生産量との比較でも、3.6%増とやや上回る結果となつた。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：骨付き肉ベース。

注2：成鶏肉を含む。

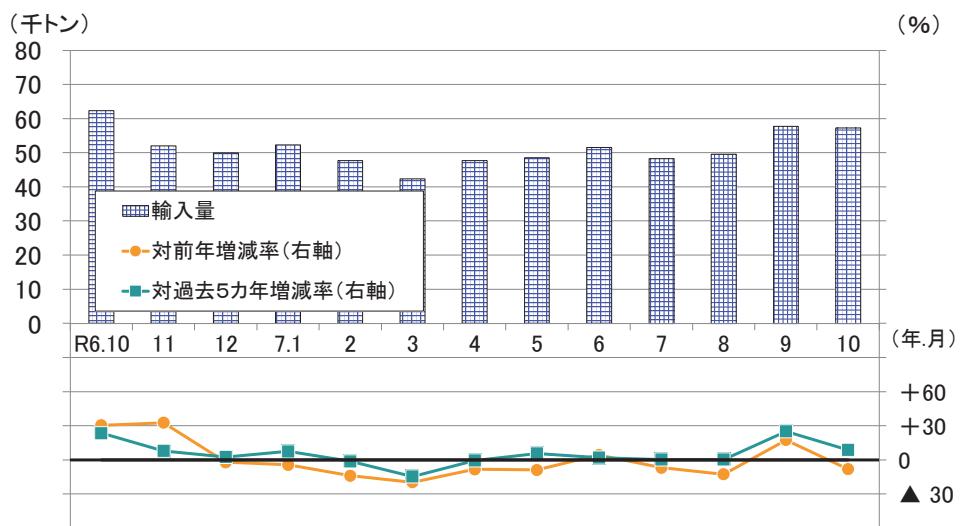
輸入量

10月の輸入量は、主要輸入先の相場高騰や労働者不足に伴う減産などにより輸入が抑制されたことなどから、5万7322トン（前

年同月比8.0%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図2）。

なお、過去5カ年の10月の平均輸入量との比較では、8.9%増とかなりの程度上回る結果となつた。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」

注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

10月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注)は、552グラム（前年同月比0.3%増）と前年同月並みとなった（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の10月の平均消費量との比較では、3.5%増とやや上回る結果となった。

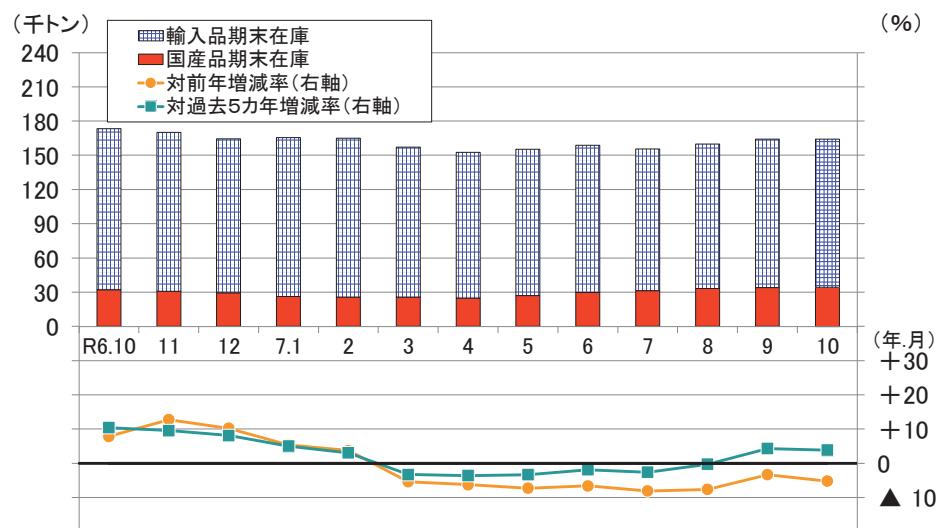
（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

推定期末在庫・推定出回り量

10月の推定期末在庫は、16万4307トン（前年同月比5.2%減）と前年同月をやや下回った（図3）。このうち、輸入品は12万9858トン（同8.0%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

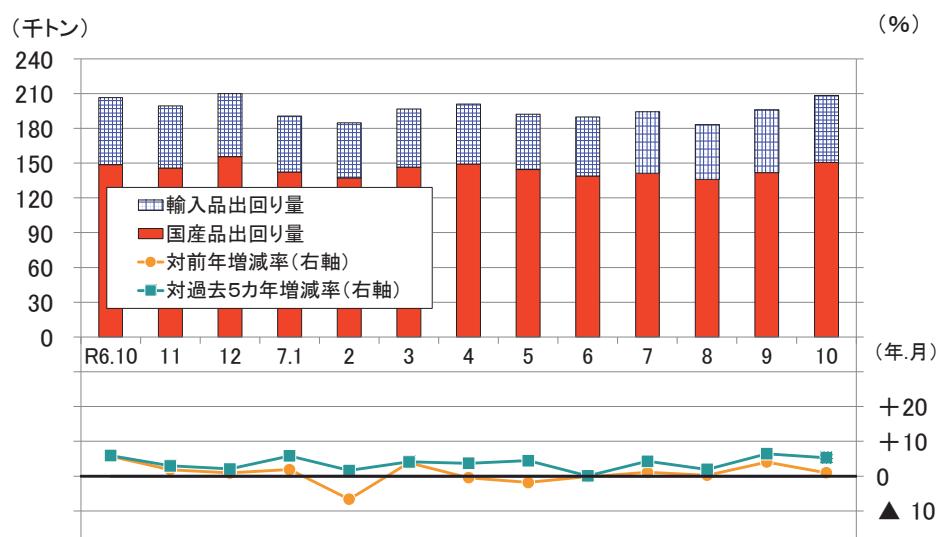
推定出回り量は、20万8356トン（同1.0%増）と前年同月をわずかに上回った（図4）。このうち、国産品は15万642トン（同1.4%増）と前年同月をわずかに上回った一方、輸入品は5万7714トン（同0.0%減）と前年同月並みとなった。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 越川 紗弥)

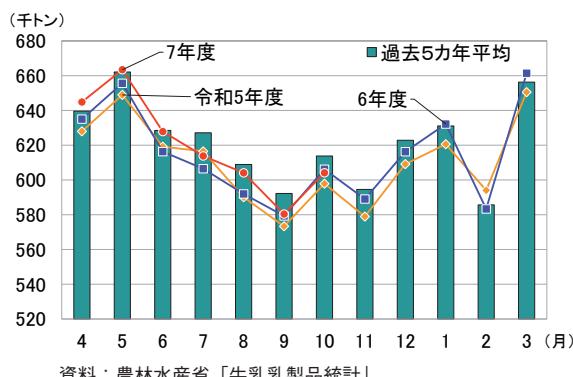
牛乳・乳製品

7年10月の全国の生乳生産量、前年同月を8カ月ぶりに下回る

北海道の生乳生産量、10月は前年同月比0.2%減

令和7年10月の生乳生産量は、60万4114トン（前年同月比0.3%減）と8カ月ぶり、前年2月のうるう年による影響を踏まえると実質15カ月ぶりに前年同月を下回った（図1）。地域別では、北海道が35万3438トン（同0.2%減）となり、15カ月ぶりに前年同月を下回った。また、都府県でも25万676トン（同0.5%減）と、2カ月連続で前年同月を下回った。

図1 生乳生産量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

10月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは33万1537トン（同2.4%減）と、3カ月連続で前年同月を下回った。このうち、業務用向けについては2万4508トン（同10.9%減）と5カ月連続で前年同月を下回った。

一方、乳製品向けは26万8994トン（同2.4%増）と8カ月連続で前年同月を上回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは

5万9482トン（同0.7%増）と2カ月ぶりに上回った。チーズ向けについても、3万4500トン（同1.3%増）と2カ月連続で上回った。また、脱脂粉乳・バター等向けでも、12万9089トン（同4.7%増）となり、15カ月連続で前年同月を上回った（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

全国の10月の牛乳生産量、前年同月比2.8%減

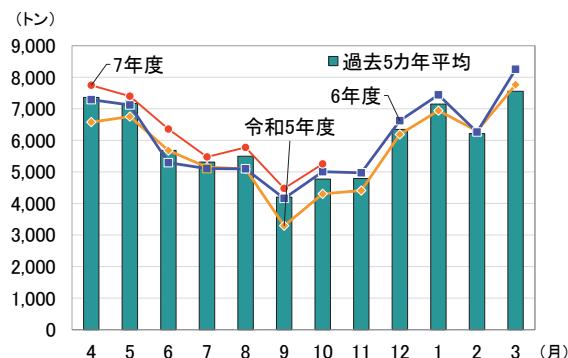
10月の牛乳等生産量を見ると、飲用牛乳等のうち牛乳は、26万6700キロリットル（前年同月比2.8%減）と前年同月を下回った。成分調整牛乳は前年割れが継続しており、1万7002キロリットル（同7.1%減）となつた。また、加工乳については、1万1772キロリットル（同9.2%減）と3カ月連続で前年同月を下回った。

はつ酵乳は、8万8153キロリットル（同0.7%減）と2カ月ぶりに下回った。

10月のバター在庫量、前年同月比24.0%増

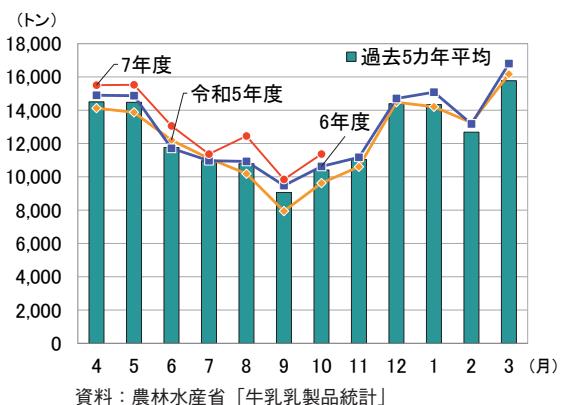
10月のバターの生産量は5254トン（前年同月比4.8%増）と、8カ月連続で前年同月を上回った（図2）。一方、出回り量は6836トン（同2.6%減）と5カ月連続で下回った（農畜産業振興機構調べ）。在庫量については、14カ月連続で前年同月を上回り、10月末は3万851トン（同24.0%増）となつた（図3）。

図2 バターの生産量の推移



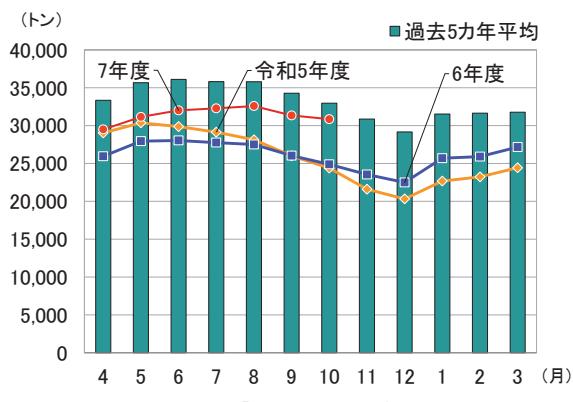
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図4 脱脂粉乳の生産量の推移



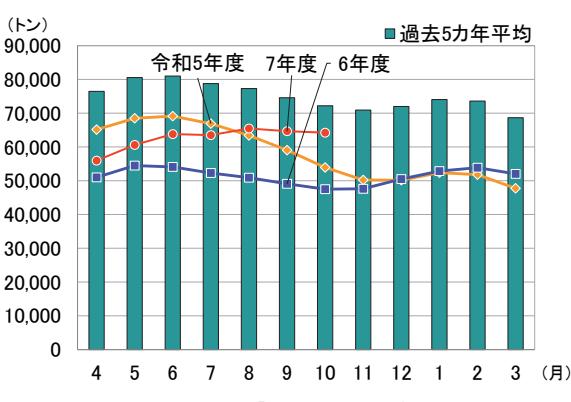
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図3 バターの在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

10月の脱脂粉乳在庫量、前年同月比35.2%増

10月の脱脂粉乳の生産量は、1万1368トン（前年同月比7.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図4）。一方、出回り量は1万1823トン（同3.2%減）と9カ月連続で下回った（農畜産業振興機構調べ）。10月末の在庫量は、6万4221トン（同35.2%増）と11カ月連続で上回った。（図5）。

11月の牛乳類全体販売個数、前年同期を下回る

令和7年8月の飲用乳価の改定に伴い、牛乳等の製品価格の値上げが行われた。一般社団法人Jミルクが令和7年12月5日に公表したJミルク需給短信（月報）によると、8月から直近11月までの各月の牛乳類販売個数の前年比は、4品目（牛乳、成分調整牛乳、加工乳、乳飲料）全てで下回って推移した。一方、11月は、乳飲料以外の3品目で前月と比べると、減少幅が縮小した。牛乳の各月の販売動向を見ると、8月は前年同月比0.8%減、9月は同2.0%減、10月は同2.4%減、11月は同0.9%減となった。値上げ当初の減少幅がそれほど大きくなかったことに

については、各社の販売促進の取り組みなどに加えて、店頭価格の値上げまでに一定の時間を要したからと考えられる。直近11月の前年同期比の減少幅は、3カ月ぶりに縮小したものの、今後は気温の低下とともに消費が

減退することから、引き続き、牛乳類の需要の動向を注視する必要がある。

(酪農乳業部 天野 明日香)

鶏卵

7年11月の鶏卵卸売価格、前年同月比21.0%高

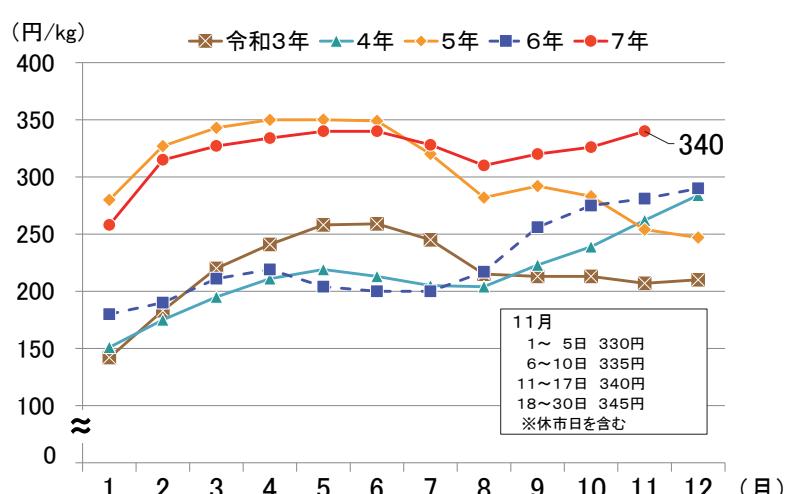
卸売価格

令和7年11月の鶏卵卸売価格（東京、Mサイズ基準値）は、1キログラム当たり340円（前年同月差59円高、前年同月比21.0%高）と、前年同月の同価格を大幅に上回った（図）。同価格の日ごとの推移を見ると、月初の同330円から6日には同335円、11日には340円、18日には345円と計3回の上昇があり、月間の上昇幅は同15円となった。

なお、過去5カ年の11月の平均卸売価格は235円であり、それと比較しても、44.7%高と大幅に上回る結果となった。

供給面を見ると、気温低下による卵重の回復が見られ、大玉が増加傾向となった。需要面を見ると、量販筋では鍋物やおでんなどの季節需要が堅調で、外食筋でも和食を中心に卵料理が展開されるなど、一定の需要が見られた。

図 鶏卵卸売価格（東京、Mサイズ基準値）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

家計消費量

10月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）^(注)は、892グラム（前年同月比1.1%減）と前年同月をわずかに下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の10月の平均消費量との比較でも、4.6%減とやや下回る結果となつた。

（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

（畜産振興部 越川 紗弥）

令和7年度上半期の食肉需給

令和7年度上半期（4～9月）の食肉の畜種別の需給動向は以下の通り。

1 牛肉

生産量、和牛・交雑種は増加するも乳用種は減少

上半期の牛肉生産量は、17万1334トン（前年同期比1.0%減）と前年同期をわずかに下回った（図1）。品種別に見ると、和牛は9万605トン（同3.9%増）とやや、交雑種は4万6094トン（同1.5%増）とわずかに、いずれも前年同期を上回った。乳用種は3万4341トン（同12.7%減）と前年同期をかなり大きく下回り、和牛については和牛受精卵移植技術の活用により生産量が増加した

一方、乳用種については引き続き減少傾向で推移し、全体では減少に転じた。

輸入量、冷蔵品・冷凍品ともに減少

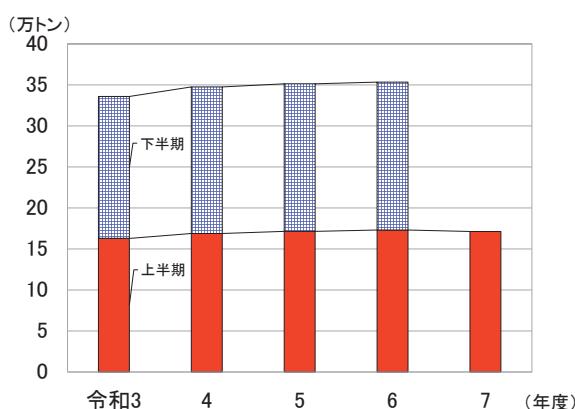
上半期の牛肉輸入量は、冷蔵品、冷凍品ともに減少したことから、27万2194トン^(注1)（前年同期比7.9%減）と前年同期をかなりの程度下回った（図2）。

（注1）輸入量は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

冷蔵品については、国内需要が低調な中、現地価格の高止まりの影響などにより、ほとんどの輸入先からの輸入量が減少したことなどから、9万271トン（同13.1%減）と前年同期をかなり大きく下回った。国別に見ると、全体の53%を占めた豪州産は4万8205トン（同2.8%減）とわずかに、同38%を占めた米国産は3万4078トン（同24.8%減）と大幅に、いずれも前年同期を下回った。

冷凍品については、米国産ショートブレート（バラ）が現地価格の軟化から輸入量が増加した一方、全体的には現地価格の上昇を受けて、ほとんどの輸入先からの輸入量が減少

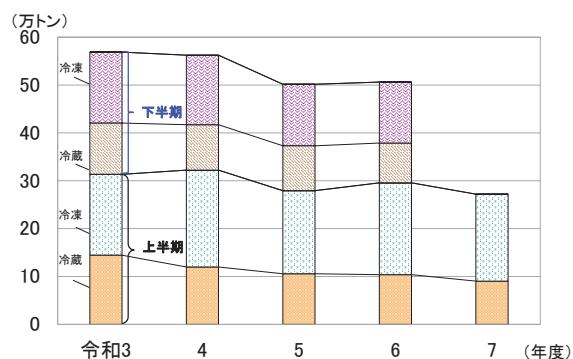
図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

したことなどから、18万1820トン（同5.1%減）と前年同期をやや下回った。国別に見ると、全体の46%を占めた豪州産は8万3482トン（同9.0%減）と前年同期をかなりの程度下回った一方、同36%を占めた米国産は6万5698トン（同21.8%増）と前年同期を大幅に上回った。

図2 牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

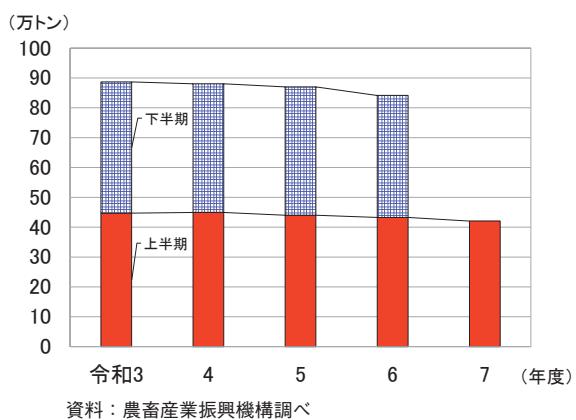
推定出回り量、国産品・輸入品ともに減少

上半期の牛肉推定出回り量は、物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まりや円安

などの影響から、42万817トン（前年同期比2.7%減）と前年同期をわずかに下回った（図3）。このうち、国産品は16万5921トン（同2.6%減）、輸入品は25万4897トン（同2.9%減）と、ともに前年同期をわずかに下回った。

また、上半期（9月）の牛肉推定期末在庫は、14万9418トン（同4.1%減）と前年同期をやや下回った。このうち、輸入品は13万8987トン（同3.8%減）とやや、国産品は1万431トン（同7.7%減）とかなりの程度、いずれも前年同期を下回った。

図3 牛肉推定期末在庫の推移



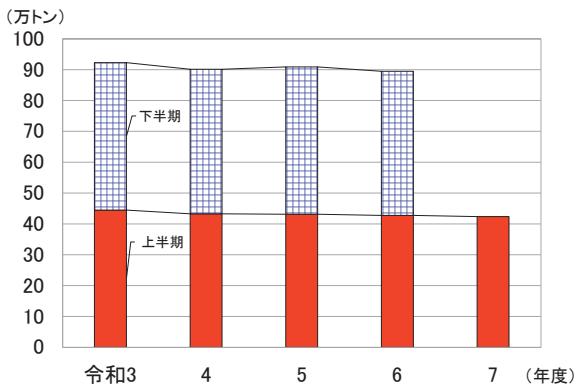
資料：農畜産業振興機構調べ

2 豚肉

生産量、わずかに減少

上半期の豚肉生産量は、猛暑の影響などによりと畜頭数が減少したことなどから、42万3770トン（前年同期比0.9%減）と前年同期をわずかに下回った（図4）。

図4 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量、冷蔵品は増加するも冷凍品は減少

上半期の豚肉輸入量は、冷蔵品は増加した一方、冷凍品は減少したことから、50万1023トン^(注2)（前年同期比4.3%減）と前年同期をやや下回った（図5）。

（注2）輸入量は、くず肉を含む。

冷蔵品は、主要輸入先の一つであるカナダ産の輸入量が増加したことなどから、20万912トン（同8.8%増）と前年同期をかなりの程度上回った。輸入先別に見ると、全体の56%を占めるカナダ産は11万2895トン（同21.2%増）と前年同期を大幅に上回った一方、同34%を占める米国産は6万7772トン（同3.4%減）と前年同期をやや下回った。

冷凍品は、国内の輸入品在庫が多いことに加え、為替相場や輸入先での現地相場高騰の影響などから、30万63トン（同11.4%減）と前年同期をかなり大きく下回った。輸入先別に見ると、全体の32%を占めるスペイン

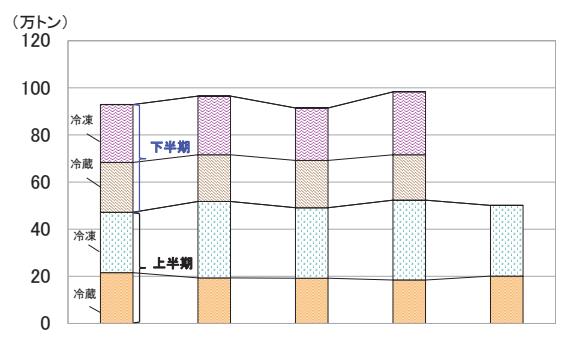
産は9万4930トン（同3.2%減）とやや、同13%を占める米国産は3万9329トン（同19.9%減）と大幅に、いずれも前年同期を下回った一方、同18%を占めるブラジル産は5万3841トン（同38.4%増）と前年同期を大幅に上回った。

推定出回り量、国産品・輸入品ともに減少

上半期の豚肉推定出回り量は、物価高騰が続く中、消費者の低価格志向を受け、90万5855トン（前年同期比1.2%減）と前年同期をわずかに下回った（図6）。このうち、国産品は42万5891トン（同0.6%減）、輸入品は47万9963トン（同1.7%減）と、ともに前年同期をわずかに下回った。

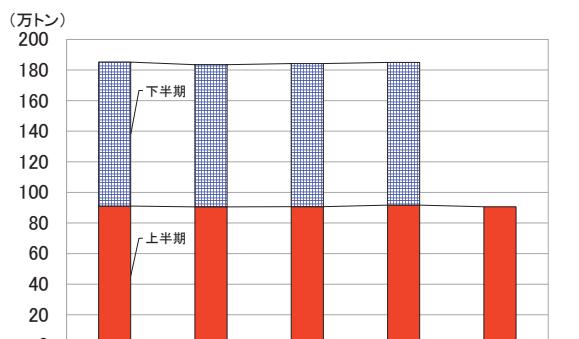
また、上半期（9月）の豚肉推定期末在庫は、23万4720トン（同5.4%増）と前年同期をやや上回った。このうち、輸入品は21万3175トン（同6.0%増）と前年同期をかなりの程度上回った一方、国産品は2万1545トン（同0.2%減）と前年同期並みとなった。

図5 豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図6 豚肉推定出回り量の推移



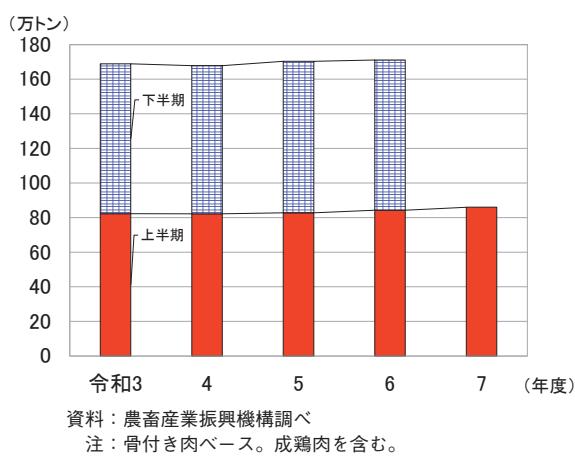
資料：農畜産業振興機構調べ

3 鶏肉

生産量、わずかに増加

上半期の鶏肉生産量は、消費者の健康志向の持続などにより、86万55トン（前年同期比2.1%増）と前年同期をわずかに上回った（図7）。

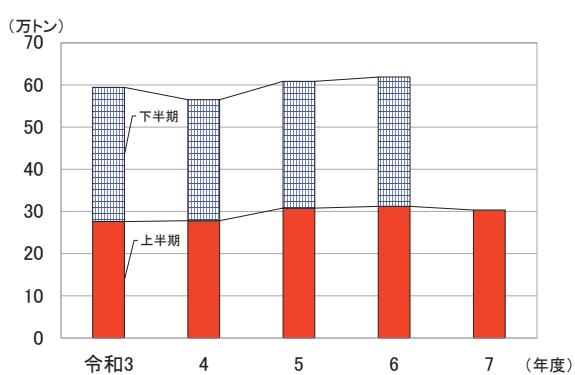
図7 鶏肉生産量の推移



輸入量、ブラジル産は減少するもタイ産は増加

上半期の鶏肉輸入量は、国内の節約志向などを背景とした堅調な鶏肉需要はあるものの、ブラジルにおける高病原性鳥インフルエンザ発生に伴う輸送船の遅延などの影響により、30万3439トン（前年同期比2.8%減）と前年同期をわずかに下回った（図8）。

図8 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

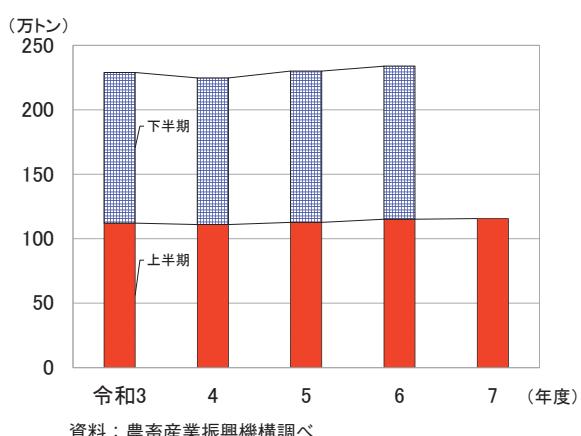
輸入先別に見ると、全体の70%を占めるブラジル産は21万1649トン（同4.1%減）と前年同期をやや下回る一方、同29%を占めるタイ産は8万7959トン（同1.4%増）と前年同期をわずかに上回った。

推定出回り量、国産品は増加も輸入品は同水準

上半期の鶏肉推定出回り量は、需要が堅調に推移していることから、全体では115万6378トン（前年同期比0.5%増）と前年同期をわずかに上回った（図9）。このうち、国産品は85万1947トン（同0.7%増）と前年同期をわずかに上回った一方、輸入品は30万4431トン（同0.1%減）と前年同期並みとなった。

上半期（9月）の鶏肉推定期末在庫は、16万4129トン（同3.3%減）と前年同期をやや下回った。このうち、輸入品は13万250トン（同4.6%減）と前年同期をやや下回った一方、国産品は3万3879トン（同2.2%増）と前年同期をわずかに上回った。

図9 鶏肉推定出回り量の推移



（畜産振興部 越川 紗弥）